沖縄子どもの未来県民会議
地域円卓会議

子どもの貧困問題を教育と福祉が連携して解決するには？
～現場の取組から考える支援のあり方について～

実施報告書

日　　時：　2019 年 2 月 12 日(火) 18:00-20:30
場　　所：　沖縄県立図書館 3F ホール（那覇市泉崎 1 丁目 20 番 1 号カフーナ旭橋 A 街区内）
主　　催：　沖縄県、沖縄子どもの未来県民会議
協　　力：　公益財団法人みらいファンド沖縄、NPO 法人まちなか研究所わくわく

報告書作成
NPO 法人まちなか研究所わくわく
公益財団法人みらいファンド沖縄

【報告】沖縄子どもの未来県民会議 地域円卓会議

■日　　時：2019 年 2 月 12 日(火) 18:00-20:30
■場　　所：沖縄県立図書館 3F ホール
■着席者数：8 名（論点提供者、司会、記録者含む）
■来場者数：85 名（福祉、医療機関・教育機関・行政等）
■主　　催：沖縄県、沖縄子どもの未来県民会議
■協　　力：公益財団法人みらいファンド沖縄
NPO 法人まちなか研究所わくわく
■お問合せ：NPO 法人まちなか研究所わくわく

論点提供　**喜舎場 健太** 氏（沖縄県 子ども生活福祉部 子ども未来政策課 課長）

子どもの貧困問題を教育と福祉が連携して解決するには？
～現場の取組から考える支援のあり方について～

沖縄県が実施した平成 27 年度「子どもの貧困実態調査」において、沖縄県の子どもの貧困率が 29.9%と全国の約 2 倍であることが明らかとなったことから、沖縄県では平成 28 年 3 月に「沖縄県子どもの貧困対策計画」を策定し、各種施策に取り組んでいるところです。教育の支援においても、学校を子どもの貧困対策のプラットフォームと位置づけ、スクールソーシャルワーカーや子供の貧困対策支援員等を通じて福祉関連機関との連携を図り、子どもの貧困解消に向けた支援を進めているところです。

今回の円卓会議では、教育や福祉の現場に携わっている関係者をお招きし、それぞれの取組成果や課題を踏まえ、子どもの貧困問題を解消するための教育と福祉の連携や、学校を中心とした支援のあり方について、県民のみなさんや関係者の方々と一緒に考えていきたいと思います。

センターメンバー

喜舎場 健太
沖縄県 子ども生活福祉部 子ども未来政策課 課長

新崎 毎子
浦添市教育委員会 指導部学校教育課 特別支援教育コーディネーター

崎原 美智子
那覇市教育委員会 学校教育部教育相談課 子ども寄添支援コーディネーター（SSW）

仲間 知穂
子ども相談支援センターゆいまわる 代表

平良 智子
南風原町 民生部 子ども課 地域福祉班 子ども元気支援員

嘉納 英明
名桜大学 国際学群国際文化教育研究学系長 大学院国際文化研究科 教授

➢ 円卓会議に参加いただいた皆さんから

事実の提供

- 沖縄県の子どもの貧困率 29.9%（H26 年）。相対的貧困家庭の約 9 万人の子ども達をどのように支援するか
- 沖縄県子どもの貧困対策計画には、「教育の支援においては、学校を子どもの貧困対策のプラットフォームと位置付け、総合的に対策を推進します」と記載されている
- 各市町村教育委員会が配置する支援員として、沖縄県内の小学校 265 校、中学校 145 校に対し、学習支援員（345 人）やスクールカウンセラー（16 人）など、合計 1285 人の支援員がいる
- 学校の中では、家庭環境への支援が、どうしても必要な部分が見えてくる。しかし、教員が入り込めない領域が沢山あった。その中で、児童相談所や警察、民生委員、役所の保護課など、様々な所との連携は、現場の中では行われている
- 学校には役割を持った人が沢山入ってくるが、学校現場として、どう使ったら良いか分からず、混乱している部分もある
- 子どもの支援を行っていく際には、記録がとても重要である。記録があって初めて、ケース会議等で事実を時系列で積み上げていく事が可能である。しかし、そこができないくらい忙しい学校現場もある
- 那覇市の就学援助率 25.49%（H25 年）。沖縄市、与那国町についで県内で 3 番目に高い
- 子ども寄添支援員：教育分野に関する知識に加えて、社会福祉等の専門的な知識、技術を用いて、児童生徒の置かれた様々な環境に働きかけて支援を行う（17 中学校区に 1 名ずつ配置）
- 子ども寄添支援員の支援事例：準要保護世帯の中学 3 年生男子。不登校支援として対応し、訪問する中で貧困が見えてきた。特別児童扶養手当等の受給資格あるが、母親は申請を行わない。その理由として、母親（子どもの頃に不登校で、虐待を受けていた）は、読み書きができないため、申請するのを恥ずかしがっていた。このように、受けられる制度が活用されていない事がある
- 名桜大学の 4 割の学生は親の仕送りが無い。また、アルバイトを行っており、奨学金（給付型ではない）により、200～300 万円の負債を抱えて生活している
- 学校における作業療法士の活動
  - ✓ 環境によって子ども達のパフォーマンスが変わる。そして、教室で授業を受ける際に必要な「動く力、考える力、感じる力」を身に付けさせていく
  - ✓ 沖縄では 65 校以上に対応。12 市町村に関わり、137 名のお子さんに関わっている
  - ✓ 76 名のお子さんは、学校や家庭で解決できる段階まできて、作業療法士としての訪問を終了している
- 学校に行くと、先生に最初は警戒されているが、「私は先生の届けたい教育の為に来ています」と、目的を真ん中に置いて話をすると、先生の不安が消えて、情報を出してくれるようになる
- 南風原町の子ども元気支援員は貧困対策支援として福祉側に配置されている。学校側が見えにくい家庭の事等の情報を持っているのが福祉側にいる利点。そして、学校と会議を持ち、お互いの情報を共有することで、連携して支援するようにしている
- 南風原町の子ども課では、地域の方から「何か買うでもなく、スーパーによく一人でいるよ」等の声を聞くので、学校に情報を伝え、学校でのその子の状態を聞き、先生にその子の困り感を聞いてもらったりしている。また、児童館や社協とその子に関りがないか確認したり、保育士さん等に同行して家庭訪問等を行う
- 学校では生徒指導委員会など、様々な会議があり、そのような場で児童生徒の情報が出る。支援員として学校に常駐している強みを活かして会議に参加させていただく。そこで情報を得ながら、福祉の立場から支援ができることを、初めて提案できるようになる

評価の提供

- 先生方は責任感が強い方が多く、全てを学校内で完結しようとするため、問題が大きくなってから、外に露呈してしまう。分業化や専門家に思いっきり任せることが学校文化の中ではできていない。その為、教育委員会や学校のお互いの仕事のやり方や子ども支援の在り方を、議論していくことも良いと思う
- 教育支援員やヘルパーの役割はとても重要だが、その方達の免許や資格、待遇の面では、まだまだ課題がある
- 学校側は福祉と連携していく際に、学校では対応できない、取り扱えない情報が出てきても断れない、対応しないといけないと思うのため、業務過多で処理できなくなることを恐れている。その為、なかなか情報を出し合えない

視点の提供

- 学校に配置されている支援員さん同士が議論していける仕組みや、保健士や児童館の方達などの様々な職種の方が議論していくのが大切だと思う
- 子どもの貧困に関しては地域間の格差がある（やんばると名護でも異なる）。その為、細やかな支援を離島や山間部も含め、どう進めていくかが課題
- 学校から情報を得られない問題を解決するためには、異なる人達と一緒に仕事を進めていく異質共同の世界を、学校や地域の中で、どの様に作っていくかが重要である。外部の方に任せるのに抵抗感がある方がいるが、異質共同の裏側にあるのは、分業である
- 先生の届けたい教育に焦点をあてた支援を前提にしていることで、先生が安心して参加ができる。それを実現するために、具体的に出来る事、できない事を出して、「こうすれば良い」からスタートできるいるので、「連携したくなる」ことをポイントにしている
- 問題解決型で連携しようと思うと、問題の解決すべき要因は取り扱えないこともある。しかし、届けたい教育を支援することは、届けられる所だけでも良いと考えられて、取り組みやすい
- 地域の公民館や自治会と学校との関係をどう繋げていくか、子ども支援を自治公民館の中で、どこに位置付けるのかを、議論をしても良いと思う
- 学校が安心して情報を提供できるように、連携の目的をしっかりと提示するのが重要だと思う
- 学校内の問題の解決策は先生が持っているため、それを引き出すアドバイスが必要
- 教員が SOS を出せる環境を作り、分業できる体制づくりを学校内に勧めていく必要がある
- 学校計画や学校教育法、生徒指導提要等に基づいて学校は経営されている事など、初めに、学校の事を知る必要がある。それが信頼に繋がると思う。信頼をベースにしないと、やみくもに情報はあげられない
- 教育とは、「指導」が中核にあるが、福祉は後ろから支える「支援」がスタンスとしてある。こうした違いがあることを認識、理解した上で、どう議論の場を作るかが大切
- 学校で抱えている問題を、役所や様々な外部の人材に繋げていく仕組みができれば、教員の負担も軽減できるし、子どもの支援にも繋がると思う

➢ 今後のアプローチの方向性（提案）

- 「福祉と学校教育」との連携は「支援と指導」という異質の連携であることを意識し、お互いを尊重したコミュニケーションをとっていこう。
- 常に中心にあるのは子どもであり、個別具体的にこの子に必要で足りていない資源は何かを明確にし、分業していこう。
- 「福祉と学校教育」との連携は、学校を取り巻く地域の特性を汲み取りながら方向性を決め、あらゆる地域資源を活かした計画を立てるべき。

■参加者によるサブセッション

子どもの貧困問題を教育と福祉が連携して解決するには？
～現場の取組から考える支援のあり方について～（原文のまま）

①
・第三者が支援に関わる必要
・教育、学校、教員のことについて知ること（抱え込む体質がある）また、他機関についても知ってもらう
・子どもたちに関わる作業療法士、スモールステップの積み重ね、将来に渡って必要だが携わっている人は少ない
・異業種の連携が重要！（学校、行政、医療、地域など、各専門家の力を使う）

②
・貧困が見えにくい
・学校側が手放す。地域に任せることも大切
・南風原町のケースはうまくいっている方だ。なぜうまくいっているかの研究

③
・PTA や保健室の先生との連携

④
・学校が福祉をもっと頼ってはどうか。福祉の視点での支援も重要

⑤
・学校に入りづらい環境がある
・先生に言いづらい環境
・学校と福祉に企業等を入れる環境
・制度がついていけない
・福祉と教育の話をする
・学校と福祉のエビデンスづくりが必要、計画、理論

⑥
・校納金未納の問題（計画性のなさ、使い込み？）
・地域市町村福祉課との連携、相談
・役所が介入しないケースやできないケース
・市町村の規模により対応できないケースも
・コーディネートができる部署の重要性（自治体、学校）
・広域派遣で解決できるのでは？（国頭地区）
・就学支援給付金で相殺
・（多くはないが）保護課が校納金の納入を促すところもある

⑦
・待機児童の受け皿
　→親子支援（親への指導）
　→学童設置（民間主導）
　→費用面補助
・教師へのフォロー（教師の負担増）
　→教師数の増員
・地域での見守り
・医療施設との連携、受入（障がい者福祉含む）

⑧
・どうして学校と連携が難しい？
・学力対策ばかりしてない？
・子どもの困り感を上げた教員をもっと評価してほしい
・学力テストより貧困対策に力を入れる宣言をする！
・知事より貧困対策に取り組むよう沖縄県全体にお願い。
・安心感、安全、居心地、子どもが望む学校づくり。そしたら勉強も自然にする

⑨
・部活も貧困で諦めてほしくない
・自身もシングルマザーで自身がなにか助けたい！シングルマザー（お母さん）サポート。もし、子どもにもサポートできれば。親の貧困を先に対策すべき。生きる力を育

てる（子どもにつなげる、子どものために）。連鎖を断ち切る
・自分もシングルマザー。とても気になる。子どもの貧困は子どもの問題ではない。大人が安定しないと子どもは安定しない。この仕組みを作りたい。沖縄の子どもは虫歯が多い。口腔崩壊。虫歯と学力の絡み。個々ではなく連携が大事
・教育費だけではなく公共交通の整備が必要。通学にもお金がかかる
・学校は外部からの意見がなかなか反映されない傾向あり？

⑩ ・子どもと福祉に自治会も関われないか
・自治会に地縁的なつながりで情報は入ったりしてた。マチャグワーなど交流の場があった
・学校の先生察知したり
・色々なメンバーで支援。誰にどう伝えれば？
＜事例＞
困った（水道、借金、家賃、子どもの対応）ことをチーム（弁護士、行政の多分野）が個別に回答（問題、課題の解決）

⑪ ・学校の先生が抱え込んでどこにつないだらいいのか分からず、何もできない状態を何とかしたい
・担任が気づいた時に相談できる仕組みづくりができること。管理職で止めない。

⑫ ・貧困にまつわるデータに驚いた
・子ども食堂が増えている
→全国的にも関心が高い
・子どもに寄りそう（貧困に限らず）
・支援の種類を周知
→いろんな人が関われる（関わりたい人はたくさんいる）
・情報共有のあり方（学校と行政の連携）や個人情報保護法

⑬ ・シングルマザーや若年妊婦の問題もあり
・就学前の子どもたちも課題がある
・地域の支えが大事
・地域の子どもたちの様子に目を向けたい
・子ども食堂、フードバンク
・セカンドハーベスト
・学校でのボランティア活動

⑭ ・親の自立が必要→サボタージュ？
→時間がかかる
・負の連鎖を断ち切る
・短期的課題、中長期的課題
・学校の先生は頑張っているが貧困の問題に入れない、内と外の連携（情報）、個人情報の壁が大きな課題。
・教育と福祉がお互いのホームポジション（立場を）役割分担
→確認、理解して連携や協力し合うことが大切ではないか

⑮ ・連携のタイミングのズレはなぜ生じているのか
・行政の手続きのスピード UP も課題か

⑯ ・浦添市、那覇市の 4 者協議（学校、幼稚園、児童館、学童、民生委員）
→大事なことは出てこない。「地域で見守りするしかないよね」という形で学校からは上がってくる
・先生方は「この子変かも？」で抱え込んでしまう。先生に「人の力を借りる」という考えがない。良い事例がひとつでもあれば！例えば那覇市の先生が民生委員に相談して解決など

⑰ ・スクールソーシャルワーカーが中心となって支援

・教員が生徒の出席簿や健康状態などを記録
・親への情報提供や制度の利用の説得の仕方を考える

⑱ ・不登校児の将来の就労に影響
・チームでの支援、長期的な支援が大切
・悩みを見える化するために責めるのではなく受け入れてもらえる安心感を経験
・責める人、白い目で見る人がいたら逆に役割を持たせる
・困っている人はSOSを出せない。周りの人が普段からコミュニケーション

⑲ ・教育（学校）と福祉（行政）の温度差をどう考えるか？
・意見をどうすり合わせるか

⑳ ・申請主義の支援→基準で支援スタート
・子どもで表面化する貧困（家族全体を支えないと）
・支援漏れをなくす（生活面の人的サポート）
・仕組みを単純化しAI活用のセーフティーネットシステム

沖縄子どもの未来県民会議 地域円卓会議
参加者アンケート集計

◆概要

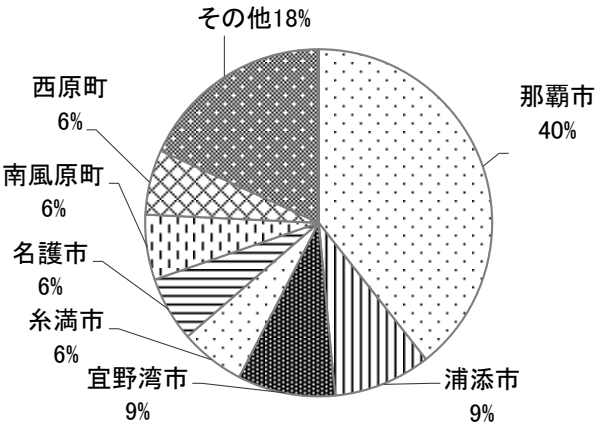
・日時：2019 年 2 月 12 日（火） 18:00-20:30

・場所：沖縄県立図書館 3F ホール

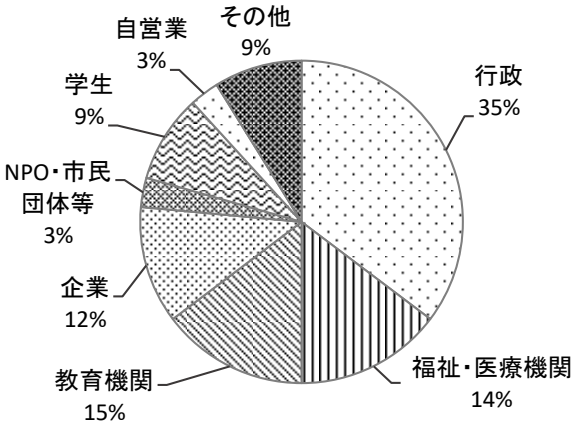
・着席者：8 名（論点提供者、司会、記録者含む）

・参加者：85 名（アンケート回収 35 名、回収率 41%）

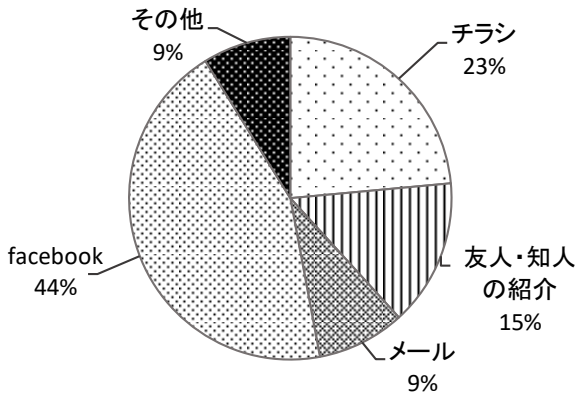
１．どちらから？



２．所属



３．円卓会議はどのように知ったか



４．満足度

平均：4.5（5 点中）

5.満足	4.概ね満足	3.普通	2.あまり満足してない	1.不満足
16 名	15 名	2 名	2 名	0 名

５．満足度の理由

（５．満足）

- すべてがとても良かったです
- スクールソーシャルワーカーのケースが聞けて良かった。スクールソーシャルワーカーより先に民生委員が貧しい家庭に支援していたことに驚いた
- 円卓会議という形式には初めて参加しました。司会進行の方が疑問に思ったことや焦点を当ててほしいことを相槌とともに入れることで対話のような形ですごく分かりやすかったです
- 3 人 1 組での小セッションをすることで、色々な職種の人が子どもたちの未来を考えていると知り刺激を受けました
- 平良斗星さんのコーディネートはいつも素晴らしいです。大変勉強になりました
- いろいろな立場の視点からの意見が聞けて良かったです。今までモヤモヤしていたことが少しスッキリしました
- 異なる視点で議論できた。学校側、教育側の考えや体制がよくわかった
- 知らない分野の情報をいただけました
- 今、困っている事柄についてディスカッションを通じて解決の道筋が見えてきた気がします。つなぐシステムをしっかり根付くように努力したいなと思いました
- 現状と経験を、事例を通して語ってくれたので想像もしやすく議論もしやすかったです
- メディア、体感している情報以上に深刻な課題だと理解できました
- 教育、福祉の多様な立場から話を聞くことが

できて良かった
- 教育と福祉について様々な職種の視点からの意見を聞くことができて勉強になりました。ぜひ福祉と教育についての課題でまた議論する機会を作ってもらいたいと思いました
- 子どもの活動を地域でしているが、実際の現状をあまり知らなかった。いろいろな方のお話が聞けて今後の参考になった
- いろいろな事例や取り組みについて聞けたので良かった

（４．概ね満足）
- 学校現場での支援員の配置が充実している
- 話の流れが分かりやすく、問題が明確になった
- いろんな立場の関係者が集まってよかった
- 喜納先生がまとめた話がすべてだと思う
- 連携よりも学校の文化の問題かも
- 教育福祉それぞれ現場の状況を知ることができたため
- 5 でない理由は相対的貧困の対策まで聞けなかった（アイデアが出たチームでの対応では量的に難しい課題のため、どうしていくのかを聞きたかった）
- いろんな職種の方がそれぞれの立場から教育と福祉の連携についてのいろんな考えが聞けて良かった。グループワークも面白かったです
- 大変勉強になりました。子どもの貧困問題について地域の視点で聞かせていただきました
- 学校内での状況の意見があって、先生方の困り感も多くあることが分かった。「学校をプラットホーム」にするためには校内でのシステム構築や異業種の多職種の連携が重要だということを改めて感じることができた
- 大変すばらしい方々、先生方が集まって一度に様々な話を聞く機会はなかなかないのでそういう意味では大変いい機会、場だったと思います
- みなさんそれぞれの立場で話されるのでやはり時間が徐々に押していくのも重々理解できます。次回への改善策のひとつとして提案ですが、よくお話されそうな年配の女性の方は、最後の方に置かれてはいかがでしょうか。年の若い方はきちんとご自分の時間配分を守られると思いますので。きっとうまく時間が回ると思います。せっかく素晴らしい皆さまが集まっていただいているのでお一人だけの話ではなくみなさんのお話を聞きたいです。
- 学校と福祉の問題を取り上げてくださってありがとうございます。学校現場からの参加者があったのかどうか気になりました。お互いをもっと知るためにどういった仕組みが必要なのか成功事例としての南風原の取り組みを共有できればと思います
- グループセッションでいろいろなお話を聞くことができたから
- テーマがぶれることがあり、話のまとまりがなかったところがあった
- 着席者の説明等、事前に情報を得ておきたかった
- 今回の教育、福祉の連携はお互いがお互いを知らないことが 1 番の問題のため、それぞれも問題点や課題点を要点とした資料があるとより理解につながったと感じた
- 支援する人は増えたがコーディネーターは少ない。「仕組みから使え」というのは簡単だが信頼関係を築くのは簡単ではない
- 大変勉強になりました。最後の司会の方からあったように“相対的貧困”状態の子どもを救い上げるにはどうしたらいいかぜひ次回掘って欲しいです
- 現場の人の生の体験、事例を聞くことができた

（3．ふつう）

- ごめんなさい別件あり半分で退出です。新崎先生のエピソードはすごいがテーマからちょっと離れている感じもする
- 事前に想定していた範囲の話を超えなかったため

（2．あまり満足していない）

- あまり新しい意見はなかったように思います。学校の中での福祉に1番近い人は保健室の先生だと思います。つなぐ人になってもらったらいいと思いました。それと子どもたちの情報を持っているのは母です。PTA の力も使ったらと思います
- 教育と福祉が連携していくテーマが掘り下げられてないと感じた。もっと根本的なところの視点のテーマの内容をしてほしい

5．円卓会議で印象に残ったこと

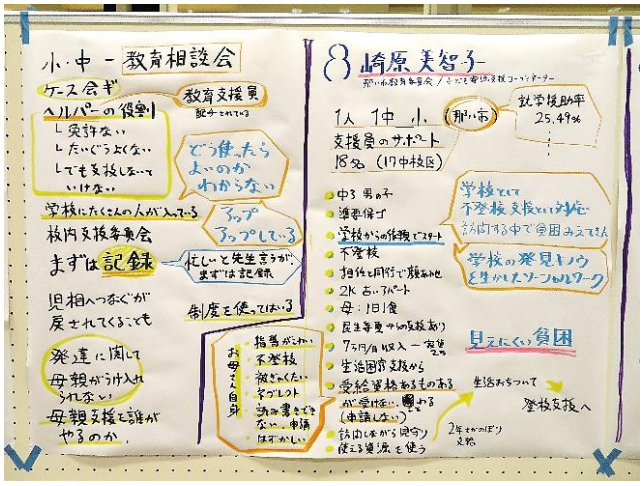
- 就学前の貧困世帯の支援が重要ではないかと改めて感じた。若年妊婦であったり、ひとり親世帯であったり、子育てが楽しい、子どもがかわいいと思えるような環境づくりが必要と感じました
- 共同。何事も共同していけば大きな力になると感じました
- 個人情報保護の問題や情報シェアの問題。上手く仕組みを作ればある程度解決できそう。事例や問題のデータベース化など
- 連携というより学校の体質、文化の問題（テーマ）になっていた
- 実家が歯科であることから、口腔崩壊の子たちを長年目の当たりにしています。南風原町の歯医者同行とても良いと思いました
- 個々にある良い仕組みを情報共有し、あちこちの市町村で使える制度化していければいいなと思います
- 作業療法の学生が就活するにあたり、病院中心になっているので学校現場で OT が活躍できることが分かり嬉しかったです
- 異業種、協働
- 学校の先生方は抱え込みがち。協働するマインドを学生の頃から学ぶというのは good かもと思いました。お互いを理解し、信頼関係を築いていくことが大事だなというのに全くもって同感しました
- 崎原さんの最後の話の中で、学校の会議等に入っていけたら、そこで自分が何をできるか示すことが大事…というようなことを言われててハッとしました。福祉の立場で自分ができることを学校側に伝えきれていないと思いました。学校の先生方の仕事の大変さは分かっているつもりでも、本当の理解はできていないなとも感じました。学校計画、経営などを知ることから始めてみようかなと思います
- サブセッション（3名程度）で意見を聞けたことが良かったです。実際に現場にいる方のお話も聞けました
- お互いを知ること。個人情報についての理解不足
- 最後にあったように“教育と福祉の連携、協働”はとても大事だと思っています。これからも考え続け、知り続け、学び続け、お互い理解し続けることが大切だと思いました
- 自分ごととしてとらえることができた
- 第2弾お待ちしています！
- 仲間さんのお話が新鮮でした。ひとつの方法として学ばせていただきました。フィールドが異なっている者同士でも明確な目的を互いに共有し、解決に向かう（向かいたい）要求がひとつになれば十分連携し合えるというところ
- 連携ではなく協働する、しかも多職種でというキーワードがこれから大切になってくる！学校はムラ社会になので徐々に拓いていくしかない！生徒指導部会（週1）に福祉課の人にも来てもらう

- コーディネートが上手くいくよう問題解決型よりも届けたい教育に視点を当てていくということ
- 学校をプラットホームにするなら、もう少しそのプラットホームの整理が必要だと思う。整理とは学校の先生の負担を減らすこと、先生の相談に乗ってくれる人がいること、先生同士が対等に話ができる環境があること（上司に意見が言えないとかありそうだから）
- 会議の進め方もとても参考になるポイントがたくさんあり勉強になりました。沖縄県の今後の進め方もとても気になります
- 発表者の選考はもう少し考慮したほうがいいと思います。時間がもったいないです。平良さんお疲れ様でした
- 学校内にコーディネーターが必要。「誰につなぐか」「何が問題か」をきちんと判断するスキルを持つ人材。フリーで動ける人がいないと対応ができない
- 教育（指導）と福祉（支援）の考え方の違い。先生が情報を出せない状況
- 教育機関と公民館の連携
- PTA の方との学校内連携はいいなと思いました。また、教師の「抱え込み」がネックにあると感じました。教員の理解なしでは福祉との連携はできないと思いました
- 学校、福祉（社協、行政）、地域をつなぐ。コーディネーターが必要。お互いのことを知り合い理解して助け合って貧困対策できたらいいと思いました
- 異質共同。お互いに知り合い認め合うことが大切だと感じました。みんなで考えることでいい知恵がたくさん出るのでいろんな人とひとつのテーマで考えることが大切ですね。
- 新崎さんのクールダウンの話
- 異質共同は丸パクリしたい考えです。
- 指導と支援の違いを認識した学校と福祉の連携、学校業務の分業化、小さい問題の時に関わることが大事

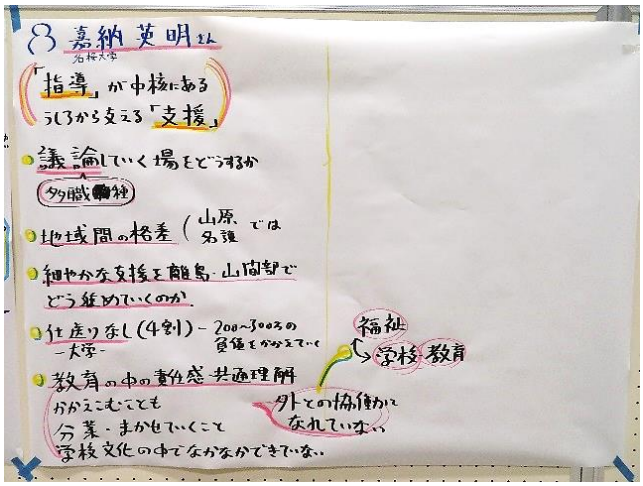
（写真）会場の様子

沖縄子どもの未来県民会議
地域円卓会議
第72回
2019.2月12日(火)
18:00~20:30
沖縄県立図書館 3Fホール
テーマ
子どもの貧困問題を
教育と福祉が連携して
解決するには？
～現場の取組から考える
支援のあり方について～
(司会) 平良
喜舎場
新崎
嘉納
崎原
仲間
主催 沖縄県、沖縄子どもの未来県民会議
協力 (公財)みらいファンド沖縄
NPO法人 まちなか研究所 わくわく
異質協働
目的ベクトル 先生やりたい、入りたい
目的の立て方
相対的貧困の広い部分は
つみのこした。
学校と福祉。

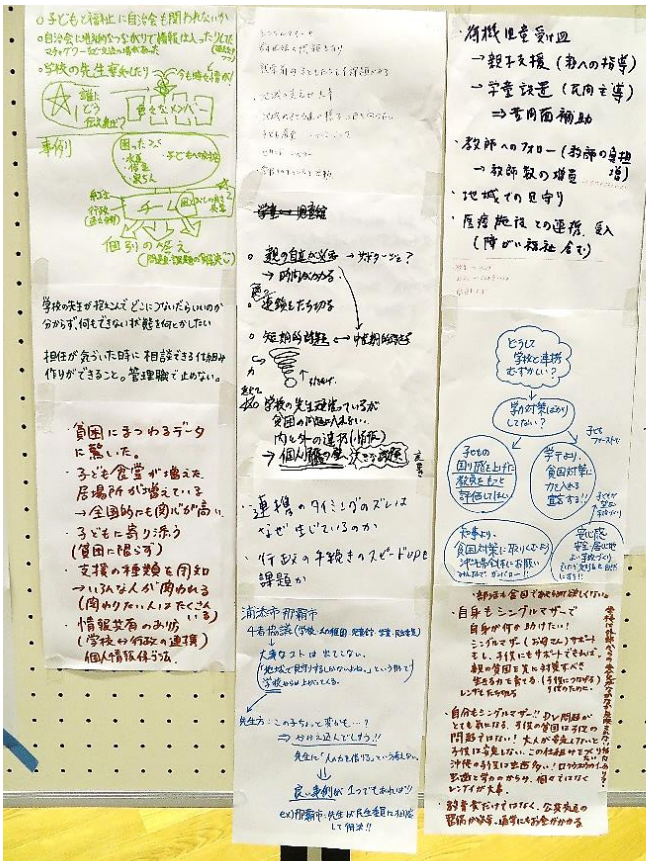
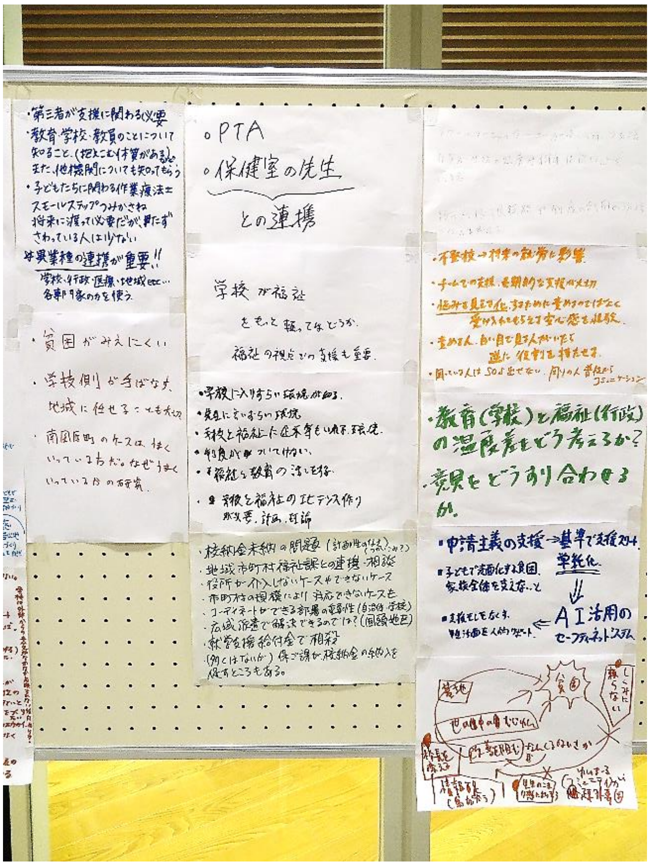
論点提供
喜舎場さん
29.9% (13.9%)
子どもの貧困率
ひとり親世帯の貧困率 58.9%
就学援助率 23.6%
不登校 6.9人
中1退学(高校) 2.1%
中学卒業後進路未決定率 2.5%
県計画
学校を子どもの貧困対策のプラットフォーム
学校
教育委員会 福祉
家庭
連携
新崎毎子さん
小へ養護学校 (現役)
南城→浦添市 (退職)
特別支援学校
担任からの気づき
学年→教頭
きずのある子
同じ服の子
給食をガツガツたべる
記録
ケース会ギ
(児相)
施設へ
お父さんが変わりました
コンビニで万引き
家庭環境への支援必要
教育が入りにくい領域
ADHD
高等学校
クールダウン
チームで(校内)対応していた
家庭支援
家のようじなどやたり
民生委員
保護課職員


小・中 - 教育相談会
ケース会ギ
ヘルパーの役割
教育支援員
どう使ったらよいのかわからない
学校にたくさんの人が入った
校内支援委員会
まずは記録
忙しいと先生方ですが、まずは記録
児相へつなぐが戻されてくることも
制度を使っている
発達に関して母親がうけ入れられない。
母親支援を誰がやるのか。
崎原美智子
1人 1中 1小 (那覇市)
就学援助率 25.49%
支援員のサポート
18名 (17中校区)
中3 男のみ
進路保障
学校からの依頼でスタート
不登校
母子と同居で難聴地
2K 古いアパート
母：1日食
民生委員からの支援あり
7万円/月 収入一家族
生活困窮支援から
受給資格あるものが受けない、導入(申請しない)
訪問しながら関係
使える資源を使う
学校として不登校支援という対応
訪問する中で貧困みえてきた
学校の発見ノウハウを生かしたソーシャルワーク
見えにくい貧困
生活のちがいについて
学校支援へ
2年かけてボランティア文化
お母さん自身
指導がふわい
不登校
被害妄想
ネグレクト
申し書きできない、申請はずかしい

仲間知穂さん
こども相談支援センター かいまのる
学校作業療法
日本版にアレンジして
その人がやりたいことを実現させる
すべての子どもの評価
子ども
動く力
考える力
感じる力
環境によってパフォーマンス変わる
環境分析
やろう文化的価値
3つの分析
多職種連携
チームとして
10カ月で終了するケース
学校で子どもが期待される行動/本人がしたいことを実現
親
子
先生
コンサルテイング
情報提供しながらチームとして
65校以上訪問
12市町村
1377名
976名訪問終了
学校・家庭で集めるように
平良智子さん
南風原町/子ども支援課
家庭に入っていく
こども課でいろいろあったが
状況をハクする
地域・学校へ
保健士と訪問 (まずは保健士からプロローグ)
地域からの情報
スクール・児童館
歯科同行
社協
調査→スタッフ
福祉につながる
学校と情報共有できる環境
家庭環境がどうあろうと
届けたい教育
本人がやりたいことを出す
できることからとりくむよう支援
今できることからとりくむ
お母さんが事務所をやめられる


嘉納英明さん
名桜大学
「指導」が中核にある
うしろから支える「支援」
議論していく場をどうするか
多職種
地域間の格差 (山原 では 名護
細やかな支援を離島・山間部でどう延めていくのか
仕送りなし(4割) - 200~300万の負担をかかえている
教育の中の動機 共通理解
かかえこむことも
分業・まかせていくこと
学校文化の中でなかなかできていない。
福祉
学校 教育
外との協働がなれていない

異質協働をどうつくるか
子ばなすのではなくまかせる
バトンタッチ？分業？
小さな会ギ
困ったことすぐ伝えられる
困り感を感じる外へつなぐ人へ
医療は多職種連携と常にとても
学生の方から
学校が福祉と連携すること
学校で対応しきれない情報
実現可能な要望
先生の届けたい教育を軸に
安心して参加できる
連携したくなる
問題解決型
届けたい教育から
何ができるかを示す提案
学校の会ギへ参加共有
SOSを出せて連携へ
社会教育
地域をキャッチしている
担任の何周の責任感
3年の子どもをチームとしてみるか
教育 福祉 子ども 家庭 地域
地回指導
スピード
在籍しているのは学校
人ちょうなりすぎるとよくない
相手を理解する
学校計画経営を知る
信頼につながる
自治会民館と役所・学校
居場所
学校内のシステム
校長トップ
つなぐ人 窓口は誰？
コーディネーター
生と指導
支援員が校内チームとなって


育児放棄受け皿
→親子支援(親への指導)
⇒費用面補助
・地域での見守り
貧困にまつわるデータに驚いた。
・子ども食堂が増えた 居場所が増えている
→全国的にも関心が高い。
・子どもに寄り添う(貧困に限らず)
・支援の種類を周知
→いろんな人が関われる(関わりたい人はたくさんいる)
・情報共有のあり方(学校⇔行政の連携)
個人情報保護法
担任が気づいた時に相談できる仕組み作りができること。管理職で止めない。
・連携のタイミングのズレはなぜ生じているのか
・行政の手続きのスピードUPも課題か

○PTA
○保健室の先生
との連携
学校が福祉
・貧困がみえにくい
・教育(学校)と福祉(行政)の温度差をどう考えるか?
・意見をどうすり合わせるか。
AI活用の
セーフティネットシステム